

# 林芙美子全集に未収録の作品について

附資料 林芙美子全集（文泉堂出版）未収録作品リスト

浦野利喜子 著  
久保卓哉 補

林芙美子全集は新潮社と文泉堂出版から刊行されているが、かならずしも全作品が収められているわけではない。未収録の作品を特定し、初出雑誌と初版本から原文を収集する作業を続けてみると、その数はかなりのものになる。短詩、長詩、紀行、映画・演劇評論、童話、絵本、書簡などである。研究する上で、資料の見落としは致命的である。今後、林芙美子研究は次の段階に入る可能性がある。拙稿の末尾に、未収録作品リストを附して、資料とした。

「キーワード」 林芙美子全集 花のいのち 凍れる大地 東条英機 マッカーサー 新女苑

## はじめに

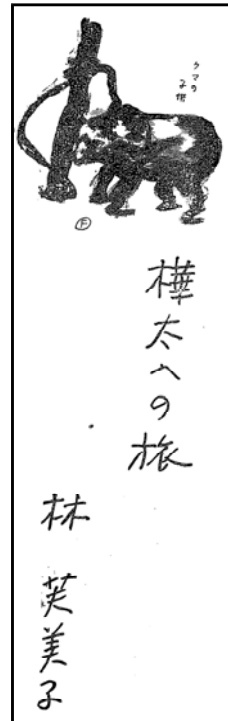
林芙美子は、昭和二十六年六月二十八日、下落合四丁目の書齋で息をひきとった。四十八歳の短い生涯だった。

芙美子の人と文学を理解するためには、一篇でも多く芙美子の作品を読まなければならない。そう考えた私は西早稲田の古書店で、文泉堂出版『林芙美子全集』全十六巻（昭和五十二年刊）を買い求めて一篇々を読むとともに、芙美子が多感な少女時代を過ごした尾道を二度訪れた。

尾道の市立図書館を訪ねたときは、林芙美子コーナーの書棚の前で、足が釘付けになった。芙美子作品の初版本がずらりと並んでいたからだ。芙美子の絵本である『フランダーズの犬』と初山滋の絵を初めて見て、その場で夢中になって読んだ。子供をこよなく愛した芙美子の肉声が、私の耳元で聞こえた気がした。



尾道での体験を契機として、私は芙美子作品の初版本探しと、初出雑誌探しとを始めた。初版本には、中川一政や林唯一、脇田和など一流の画家の絵があり、雑誌には、藤田嗣治、小磯良平、中原淳一などによる挿絵がある。なかでも、芙美子自身の手になる挿絵が入った初出雑誌を手にしたときの喜びは大きかった。



初出雑誌『文藝』昭和九年八月号 林芙美子「樺太への旅」をかざる芙美子の字と画 「クマの子供」には [F] 「オロツコの女」には「芙美子」のサインがある



初出雑誌『文藝』昭和十年三月号 林芙美子詩「北族」に  
そえられた芙美子のスケッチ サインは F. Hayashi

初版本の多くは絶版で、当時の出版社も今は存在しない。だから運よく見つけても、骨董品なみに値段が高い。国立国会図書館に行けば見ることができのだが、マイクロフィッシュを回して画面で見ることになる。

私は、初出の雑誌や初版本を探して読むうちに、これらの作品が全集に収められていないことに気がついた。しかもその数が少なくないのである。

◇ ◇  
かくて私の全集未収録作品を調べる旅が始まった。対象とした全集は、最も作品数が多い文泉堂出版『林芙美子全集』全十六卷（昭和五十二年刊）で、この第十六巻巻末に載る「年譜」と「著書目録」（共に、作成今川英子）を基礎文献とした。

### 未収作品の数量とジャンル

調査を進めるにつれて、その未収録作品の多さとジャンルの多さに驚くことになった。

芙美子の没後、最初に刊行された全集は、新潮社の『林芙美子全集』全二十三卷（昭和二十六〜二十八年）であった。この時の売れ行きがよかったのか、新潮社は続いて『林芙美子作品集』全十卷（昭和三十〜三十一年）を刊行している。その九年後の昭和三十九年には、東都書房から『林芙美子作品集』全七卷が刊行され、そして、従前の未収作品を多く補充した『林芙美子全集』全十六卷が文泉堂出版から刊行された（昭和五十二年）。この文泉堂版が現在では最も収録作品が多い。

その作品数を新潮社の『全集』と文泉堂出版の『全集』とを、目次を繰って単純に比べてみると、新潮社の作品数、二百十六に対して、文泉堂出版の作品数は、四百二である。

だが、私の調査では、文泉堂出版の『全集』に未収録のものがおお五百四ある。それをジャンル別にすると、次のようになる。

- 一 短詩型文学としての短歌、俳句
  - 二 長詩型文学としての詩
  - 三 旅する芙美子の紀行文
  - 四 映画、演劇に関する評論
  - 五 短篇小説
  - 六 長篇小説
  - 七 手紙、絵はがきなどの書簡
  - 八 日中戦争、大東亜戦争の従軍記 ジャワ、スマトラ、ボルネオにおける陸軍報道部事務嘱託としての報告文
  - 九 随筆
  - 十 童話、絵本、児童書
- これらのジャンルの未収録作品名と、雑誌名、書籍名及び発行年を、末尾に資料として付した。

### 「凍れる大地」と「満州―冬の満州紀行―」は同文

このたびの調査の中で、私が気付いたことを以下に述べよう。まず、文泉堂出版の『全集』に未収の「凍れる大地」と「満州―冬の満州紀行―」は、全く同文の作品であるのに、題名を変えて別の出版社から刊行されていることである。

芙美子が真冬の満州を訪れたのは、昭和十五年（一九四〇）一月であった。時は満州国康德七年に当り、満州には日本の軍師団、憲兵隊、少年義勇隊、開拓団、協和会本部が展開し、王道楽土を宣揚していた。訪れた町は、安東、新京、牡丹江、佳

木斯、宝清、綏芬河である。芙美子は鉄道と飛行機を利用して精力的に廻った。この時の紀行文が「凍れる大地」で、實業之日本社発行の雑誌『新女苑』の四月特別号（昭和十五年）に全文が掲載された。

この紀行文が題名を「満州―冬の満州旅行―」に変えて、林芙美子著『随筆』秩父書房に収められたのは、「凍れる大地」が『新女苑』誌に掲載されてから僅か九カ月後の、昭和十六年一月であった。

『新女苑』の「凍れる大地」には図版として、芙美子の防寒着姿（毛皮に身をくるみ、帽子を深くして目だけ出している）、牡丹江の街（膝を毛皮でおおい目だけ出した芙美子が東洋車に乗っている）、チャムスの街、少年義勇隊（氷結の地に少年義勇隊の門兵が立っている）の四枚の写真が掲載され、全ての漢字にルビがふられている。一方秩父書房の『随筆』では、題名が「満州―冬の満州旅行―」となり、写真がなく、漢字のルビはない。ちなみに、この秩父書房の『随筆』には、文泉堂出版の『全集』に未収の、「空想旅行」「兵隊の詩」「愛する馬よ」「柿」「哀傷歌」「冥心」「山川」「聚首」の八作品が収められている。

短期間のうちに題名と出版社が変わったのは、版權（出版権）の譲渡が『新女苑』の實業之日本社と秩父書房の間であったためと考えられるが、なぜ版權の譲渡が行われたのか。この原因を推測する上でヒントとなる事例がある。

佐藤卓己著『言論統制 情報官・鈴木庫三と教育の国防国

家』中公新書（二〇〇四年八月二十五日発行）の、第五章「紙の戦争」と「趣味の戦争」、5 実業之日本社の場合―内山基の恨み、の条には、『新女苑』の主筆・内山基と、内閣直属の情報局情報官・鈴木庫三少佐のやりとりが記されている（p. 347-359）。

その内容を略記すると……  
若い婦人読者を対象にした、モダンで知的な婦人雑誌『新女苑』の主筆・内山は、鈴木から『新女苑』といふ雑誌が（中略）国策に添はざる点が少なくない。編集主任の性格が自由主義の文人的性格であるから何回注意してもうまく行かぬ」、「近頃の婦人雑誌は自由主義、個人主義の立場で編纂され、従って反国策的なものが多い」と見られていた。このような状況下で林芙美子の「凍れる大地」は鈴木の前検閲を受け、「掲載不許可」のゴム印とともに突き返された。内山は三時間近くも鈴木と交渉を行い、ある程度の削除と訂正をすることで掲載が認められた。

芙美子が「満州は悪魔の如く寒い」と表現したことが、満州へ進出しようとする農民の気持をはばむと批難され、内閣が変って大蔵大臣に三井の池田成彬が就任したことを、「何んともいえないホツとした気持で受け取った」と芙美子が記したことが、「池田なんていう自由主義経済の男が大蔵大臣になったことを喜ぶなどという表現はけしからん」と削らされたというようなことであった。

…これがその内容である。  
『新女苑』に掲載された「凍れる大地」を、いま読み返して

みると、「満州は悪魔の如く寒い」を、芙美子は「満州は途方もなく寒い」と訂正しようだ。また池田が就任したことを「何んともいえないホツとした気持で受け取った」を削除して、芙美子は「阿部内閣の生命も今日か明日かと云はれてゐた。何もわからないなりに、短命な内閣をみると、何故みんな力を添へて大きく押し通せないものかと思議におもへるのだ」と書き直したようだ。作家というものは、こういう検閲に服従することをよしとしないものだが、芙美子は荒立てることなく、意図と主張を活かしたまま書き直している。決して屈服はしていない。芙美子の文才が遺憾なく発揮された一例といえよう。

なぜ版権の譲渡が行われたのか、その原因を右の事例から推測すると、『新女苑』の主筆・内山はこうした言論統制に対して嫌気がさしたからだ、ということが考えられる。一方では、掲載不許可を撤回させて、曲がりなりにも四月号に掲載できたという達成感があったからだ、ということが考えられる。内山は、芙美子の「凍れる大地」が、本として早く出版されることを望んだのだといつてよい。

### 芙美子の自筆原稿「凍れる大地」

芙美子の姪にあたる林福江氏は、二〇一一年六月二十九日、東京都新宿区にある公益財団法人新宿未来創造財団に対して一千万円の寄付をされた。この報に接したときは、福江氏の責任感の大きさと強さを感じて、日頃よくお目にかかっているにも

かわならず、私の背筋が直立した。

### ご寄付に対し感謝状の贈呈を行いました

今年6月29日、新宿区ゆかりの昭和を代表する作家、林芙美子(1903-1951)の姪にあたる林福江さん(写真左)から当財団に対し、新宿の歴史・文化芸術の普及に役立てて欲しいと1千万円のご寄付をいただきました。

福江さんは芙美子の没後、芙美子の夫である林緑敏さんとともに、芙美子の旧居をはじめ原稿や文学者仲間との書簡を含む多くの貴重な資料を守り続けてこられました。平成2年には旧宅と多くの資料を新宿区に寄贈され、同4年3月28日、林芙美子記念館が開館しました。福江さんは、記念館開館後も折にふれて立ち寄られ、同記念館、新宿歴史博物館の事業に対し、さまざまなご協力・ご支援をしてくださっております。

前日の6月28日は「林芙美子60回忌」という節目となる日でした。福江さんのご厚意に対し、当財団理事長中山弘子(新宿区長)が感謝状をお贈りしました。

今後、新宿の歴史・文化芸術の普及とさらなる発展のため、有効に使わせていただきます。



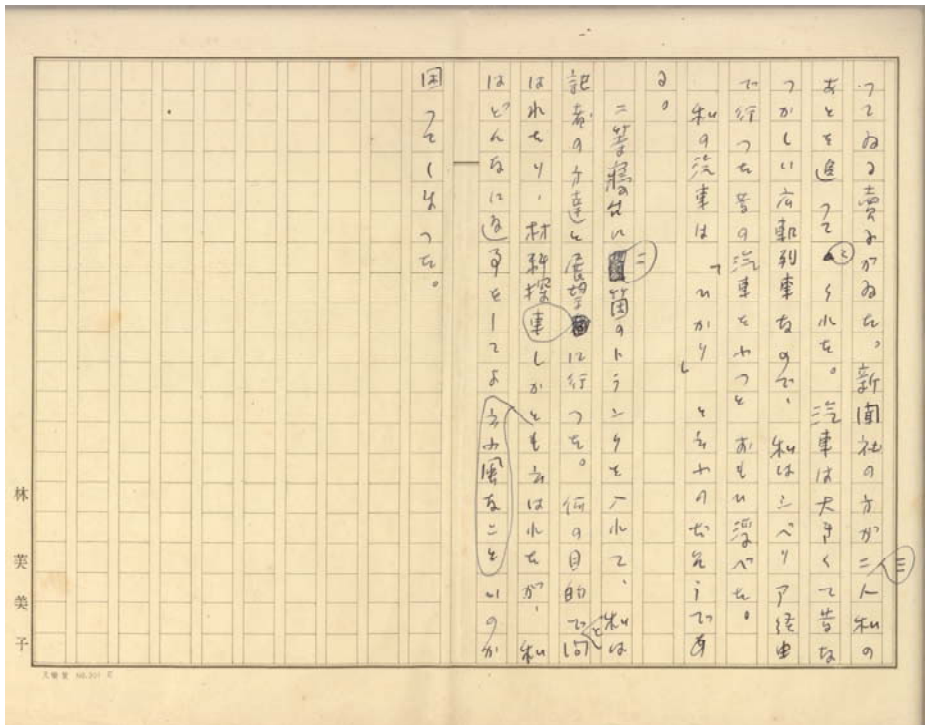
林福江氏の芳志を伝える記事

『oh!レガス新宿ニュース』平成 23 年 8 月 5 日号

その福江氏から

見せていただいたものに芙美子の自筆原稿がある。芙美子が書きかけて反故にした原稿で、林芙美子の名が印刷された久楽堂の原稿用紙一枚である。久楽堂の原稿用紙は、佐藤春夫、井伏鱒二、太宰治なども使用している。

この自筆原稿がどの作品のときのものであるのかを調べるために、全集、雑誌類、初版本を繰ったところ、「凍れる大地」を執筆した時のものであることが分った。写真で芙美子の字をお読みいただきたい。



林芙美子「凍れる大地」自筆原稿

この下書き原稿は、「凍れる大地」第一章の中頃にあたる。「凍れる大地」ではこうなっている。

朝鮮人の賣子が「あまぐりい」と呼びながら甘栗を賣つてゐる聲がしてゐる。長い列のなかの私を發見して、二三人の新聞記者の方が後を追つて來られた。

私の乗る汽車は「ひかり」と云ふのださうである。

二等寢臺に二箇のトランクを赤帽に運んでもらつて、私は記者のひとたちと後尾にある展望車へ行つた。何の目的もない旅行なので、記者の人達の満足するやうな返事も出さず、私は何となく困つてしまつた。

(傍線部が一致)

十一行の短い下書き原稿だが、これを芙美子は満州から帰つた二月二日から遠くない日に書いたはずである。書齋で想を練りながらペンを走らせる芙美子の姿がありありと目に浮かぶ。芙美子が私の前に現れて「よく下書きの作品を見つけてくださったわね」とささやく声がする気がした。

福江氏は、緑敏さんから「これは芙美子の書きくずし原稿だから、焼却処分にしなさい」と言われていたけれど、今日まで大切に持っていたとのこと、処分はいつでもできますからと語っておられた。

### 「花のいのち」と「遠い湖」は同文

芙美子の小説「花のいのち」は、昭和二十四年四月二十日に湘南書房から刊行された、林芙美子著『人形聖書』に収められたのが最初である。

だが、この「花のいのち」は、十一年前の昭和十三年に『新女苑』一月号で連載が始まつた小説「遠い湖」と同文のものである。

「遠い湖」は、『新女苑』昭和十三年六月号で完結した後、単行本としては、昭和十三年九月十六日に刊行された『林芙美子長篇小説集第三卷』（中央公論社）に「稲妻」とともに収められたのが最初で、その後、昭和十五年十二月十五日刊『七つの燈』（むらさき出版部）に収められている。芙美子は「遠い湖」への思い入れを「創作ノート」で次のように記している。

(遠い湖について)

これは私にとつてはロマンチックな作品の一つである。

「遠い湖」と云ふ表題に、私は無限のあこがれを持つてゐる。好きな題名だ。遠いところにあるその湖は、どんな色彩で、どんな大きさなのか知らないけれども、私達の若い時代には、一度はこんな仄々した時代があるものだ。(中略)

これは新女苑と云ふ雑誌に連載した。私は幼いころ華やかな少女期を持たなかつたので、色彩であふれたやうな美しい物語を書きたかつた。(中略)

これは私にとつて風変りな作品だけれど、自分として捨てがたいのでこゝへ加へた。

私は私の本領をいまだにつかむ事は出来ないけれど、私は

私の能力を無茶苦茶に涉猟することは出来る。私は作家としてはまだ若いのだ。(以下略)

## 林芙美子と戦争

この「遠い湖」が、「花のいのち」という表題になったのは十一年後の昭和二十四年であった。この昭和十三年から昭和二十四年の十一年の間に、芙美子は「風も吹くなり 雲も光るなり 生きてゐる幸福は 波間の鷗のごとく 縹渺とたゞよひ 生きてゐる幸福は あなたも知つてゐる 私もよく知つてゐる 花のいのちはみじかくて 苦しきことのみ多かれど 風も吹くなり 雲も光るなり」の詩を書いてきた。そしてこのリズム良い二句を抜き出して、「花のいのちはみじかくて 苦しきことのみ多かりき」とよく色紙などに書いた。かくて「花のいのちはみじかくて」は芙美子を象徴的に表す言葉となり、湘南書房は林芙美子著『人形聖書』を出版するに際して、より芙美子的な「花のいのち」という表題にして出版したのだと思われる。

だが、これより後、湘南書房以外に「遠い湖」を「花のいのち」の表題にすりかえた出版社はいない。新潮社の『林芙美子全集』も文泉堂出版の『林芙美子全集』も、当然のことだが、「遠い湖」である。

芙美子の作品に、全く同文のものが表題を変えて出版されているものがあると指摘したものには、「二等車」は「悪闘」と同一内容のため、前者を削除した」と記す、文泉堂出版『林芙美子全集』の「凡例」(第十六巻、361頁)にその例があるが、拙稿において、それを補うかたちでここに指摘しておきたい。

芙美子は戦争から背を向けず、終始戦争と向き合ってきた。南京進攻に同行し(昭和十二年)、漢口に従軍し(昭和十三年)、佳木斯、牡丹江、宝清を廻り(昭和十五年)、哈爾濱(昭和十六年)、そして、マレー半島、ジャワ、ボルネオ、フィリピンにまで従軍の足を伸ばした(昭和十七年)。帰国してはそのたびに従軍記を執筆し、日本各地に飛んでは戦場で見えた様子を講演して廻った。だが、戦争に向き合つて執筆したそのすべてが『全集』に収められているわけではない。

ここでは『全集』に収められていない、東条英機を迎える詩と、小説「太閤さん」と、「さよならマックアーサー元帥」を紹介しておこう。

### 【東条英機】

陸軍報道部から派遣されて窪川稲子らと共にマレー半島、ジャワ、ボルネオ、フィリピンの戦線を見て廻ったのは、昭和十七年十月から十八年五月までの約八カ月間であった。時に内閣総理大臣は東条英機で、東条は首相としてフィリピン・コレヒドール島米軍要塞陥落一周年記念のためにマニラに飛んだ。その昭和十八年五月七日、芙美子はスマトラ島を経てマニラに来て、東条を迎える立場であった。この時芙美子を書いた、東条を迎える言葉が朝日新聞に掲載されている。





生きる女や、全国にどれくらいいるか分らない浮浪児のことを描かなければならないと思つていた。それは激戦地の満州や漢口、そしてジャワ、スマトラまでもの戦線を見た芙美子が、自分に課した使命であつた。芙美子は言う。

昭和二十年の十月に私は東京へ戻つて来た。(中略)雨の降る駅頭に、始めてみずばらしい復員兵の姿を見て、私はさうした人々の代弁者となつて、何か書かなければと云ふ思ひにかられた。(中略)私の心の中には、常に泥土にまみれて、かつての戦場の露と消えた兵隊に対しての思ひが消える事なく明滅してゐるのだ。戦場の墓表と化した若い生命に対して、私はその人々の息を私の筆で吐き出してみたい願ひのみである。そして、一切、私小説などは書くまいと思ひ始めたのも此頃からであつた。

長い戦争の期間を私達は耐へながら持ちつゞけてゐた。この戦争を忘れてしまつては、第二第三の戦争にまたまきこまれてゆく可能性のある事を私は怖ろしいと思はないわけにはゆかない。戦後のみじめな庶民の暮しを、私はやはりどうしても書かずにはゐられないのだ。肉体の実存なんかどうでもいゝのだ。私と云ふ作家は精神の実存が問題なのである。：

昭和二十四年三月 下落合にて 林芙美子

(「晩菊 林芙美子文庫」あとがき)

そして、浮浪児に対してこう言う。

いつたい、全国にどれ位ゐるの浮浪児があるのかわからなけれども、大變な數に登つてゐるのではないかと思へる。

浮浪児を養育するには、社會全體の大きな慈愛と、政府の物質的な援助がなくてはどうにも、浮浪児の問題は解決しないのではないかと思へる。

乞食や浮浪児に對して何の設備もない國は本當の文化國家とは云へないだらうと思ふ。

現在、生きて苦しみにあえいでゐる人間の爲に、廣大な神社佛閣は何のやうな勤めを果してゐるのだらうか。

いまこそ、神や佛は人間世界において來て貰はなければならぬ。廣い神社佛閣を、浮浪者の爲に開放して貰ひたいものだ。

街の浮浪児が、悪いことばかりしてゐる大人の世界にみきりをつけて、街かげで、放牧の民のやうな流浪の生活をよろこび、そこを無常の天地と定めてゐると云ふ事は、私達人間に對しての最大の叛逆だと思はないではいられない。

長い戦争のおかげで、日本人には、社會人としての本當の教養がすっかり失くなつてしまつた。

浮浪児達よ、病氣で死んだりしてはいけない。どんな事があつても生きてゐることです。

(「浮浪児に就て」『婦人の爲の 日記と隨筆』愛育社文化叢書 7 愛育社 昭和二十一年十二月二十五日発行)

芙美子は、泥土にまみれて戦場の露と消えた兵隊や、戦後のみじめな庶民の暮しや、貧しいよるべない浮浪児のことを、自分が書かなければ、人はまた第二第三の戦争にまきこまれてゆくと考えていたのである。特に子供が好きな芙美子は、まだ救

われずにいる浮浪児の存在に心を痛めていた。昭和二十四年二月二十九日に放送されたNHKの「朝の訪問」でも、小説「太閤さん」は浮浪児のために書きました、と語っている。

『小説新潮』昭和二十三年二月号に発表された「太閤さん」は、戦争、飢え、インフレーション、浮浪児、強盗、パンパンガールが渦巻く都会の一隅で、何ものにもきずつけられない美しい瞳をもって生きる浮浪児の少年と、路で南京豆を売る大学生二人の物語で、「俺は太閤さんだもの橋の上さ……こもをかぶつて寝るんだ」と言った浮浪児の言葉が小説の表題となっている。戦争による辛い試練が後にものを言う時が来て、小さい太閤さんのなかからやがて本当の太閤的人物が出て来ることを芙美子は願ったのだ。まさに「浮浪児達よ、病気で死んだりしてはいけない。どんな事があつても生きてゐることです」といった芙美子の思いが表れた小説である。しかし、この「太閤さん」も「浮浪児に就て」も『全集』に収められていない。

【さよならマックアーサー元帥】

昭和二十六年四月十一日は、日本人にとって忘れられない日となった。あのマックアーサーが、トルーマン大統領によって連合国軍総司令部の最高司令官の職を解任されたからだ。終戦直後の昭和二十年八月三十日、サングラスにコーンパイプをくわえて飛行機から降り立った日から、日本国中はマックアーサーの動向に一喜一憂し、やがてその不安はマックアーサーへの信頼と感謝に変ってきていた。そのマックアーサーが解任されて本国に帰ることになったニュースは日本人に驚きととまどいを与えた。

芙美子はこの知らせを聞いたときの感慨を「さよならマックアーサー元帥」として『オール讀物』昭和二十六年六月号に発表した。

マックアーサー元帥が、総司令官を解任されましたよといふ知らせがあつた。私は、それを聞いて、暫く、呆んやりしてゐたが、何だか、胸さしがしい気持ちになつた。いつたい、これから、日本はどうなつてゆくのだろう。

コーンパイプと、マ元帥の印象は、私に強く焼きついてゐる。あの日から、何となく、このひとと苦勞を共にして來た感じが深いだけに、マ元帥の解任は意外であり、とても淋しかつた。

もう、日本の事なぞ、かまつてゐられなくなつたのかしら……。また、何處からともなく、違ふ國が兵を押しすゝめて來るのではないかといふ不安も感じられた。

マックアーサー元帥は、日本人にとって忘れたい人であり、こんなに、日本人の一人一人の胸に暖く影響した人はないであらう。

ぜひまた、のんびりといらして下さい。貴方の事は、日本人のすべてがなつかしく思ひ出すでせう。日本の歴史のなかの大切な人物になつたマックアーサー氏に對して、私

は心から、さよなら！と惜別の手をふります。



林美子

「さよなら」マツカール元帥、戦時中、東条英機への賛辞と同様、戦後、日本国民が抱いたマツカール元帥への思いを代弁している。

美美子は、戦争を直視した。何が起こっているか、その事実を伝えることは、文士たる自分の使命だと考えた。戦争の現実から目をそらして何が書けるといいうのか、と考えたのである。

美美子と戦争を論じる上で、この三篇を見逃してはならない。

おわりに

全集に未収録の作品で、美美子研究に欠かせないものはここにあげたもののほかにまだある。その詳細を論じるのは別の機会にゆずるとして、いくつかをここに紹介しておこう。

○美美子の海外渡航は、昭和五年一月、北村兼子、望月百合子など『女人藝術』誌の執筆者たち十人とともに出かけた台湾に始まる。生涯に多くの海外紀行を残した美美子が最初に著したのが、「臺灣を旅して」(『女人藝術』昭和五年三月号)、「臺灣風景―フオルモサ縦断記」(『改造』昭和五年三月号)、「臺灣のスヴニール」(『海外』昭和五年六月号)、「植民地で會つた女」(『彼女の履歴』改造社、昭和六年八月刊)である。これらの作品には、社会の底辺に生きる人々を描く美美子文学の根幹が顕れている。

○辺境の外地を好んで旅した美美子は、樺太にも足を延ばしている。そのときの紀行文が「樺太の旅」(『文藝』昭和九年八月号)で、「樺太には野山といふ野山に樹木がない」のを見て驚

長閑な風景が目に焼き付きました。...

「さよなら」マツカール元帥、戦時中、東条英機への賛辞と同様、戦後、日本国民が抱いたマツカール元帥への思いを代弁している。

美美子は、戦争を直視した。何が起こっているか、その事実を伝えることは、文士たる自分の使命だと考えた。戦争の現実から目をそらして何が書けるといいうのか、と考えたのである。

美美子と戦争を論じる上で、この三篇を見逃してはならない。

おわりに

全集に未収録の作品で、美美子研究に欠かせないものはここにあげたもののほかにまだある。その詳細を論じるのは別の機会にゆずるとして、いくつかをここに紹介しておこう。

○美美子の海外渡航は、昭和五年一月、北村兼子、望月百合子など『女人藝術』誌の執筆者たち十人とともに出かけた台湾に始まる。生涯に多くの海外紀行を残した美美子が最初に著したのが、「臺灣を旅して」(『女人藝術』昭和五年三月号)、「臺灣風景―フオルモサ縦断記」(『改造』昭和五年三月号)、「臺灣のスヴニール」(『海外』昭和五年六月号)、「植民地で會つた女」(『彼女の履歴』改造社、昭和六年八月刊)である。これらの作品には、社会の底辺に生きる人々を描く美美子文学の根幹が顕れている。

○辺境の外地を好んで旅した美美子は、樺太にも足を延ばしている。そのときの紀行文が「樺太の旅」(『文藝』昭和九年八月号)で、「樺太には野山といふ野山に樹木がない」のを見て驚

オール讀物 昭和二十六年六月号

いた芙美子は、「名刺一枚で廣大な土地を貰って、切りたいたけの樹木を切りたほして賣ってしまつた不在地主」の存在を指摘している。芙美子が見た物、足を踏み入れた地、そして触れ合った人々は、私たちの前に時空を超えて現れてくる。

○横山大観、志賀直哉と対談した『熱海閑談』（『改造』昭和二十六年一月五日新春特別増刊号）からは、時の日本画と小説の大御所たちが目する芙美子への評価が見えて興味深い。対談のなかでの芙美子は、二人の前でまことに女性らしく奥ゆかしい。

私は作品を読むたび、林芙美子の筆には魔力が宿っていると思う。

本稿は、浦野利喜子の原稿をもとにして久保卓哉が補筆した。  
また、研究課題番号21520389「鲁迅をめぐる日本人  
―新資料の発掘―に関する研究」による成果の一部であるこ  
とを記しておく。（久保卓哉）

The writings which have not been collected in the *Complete Works of Fumiko Hayashi* published by Bunsendo Shuppan(1977) :  
Appendix — A list of those writings.

URANO Tokiko  
KUBO Takuya

*The Complete Works of Fumiko Hayashi*, which have been published so far by Shinchosha in 1951 and also by Bunsendo Shuppan in 1977, cannot really be the complete works. The present author's continued persevering efforts to do research on the literary journals in which her works appeared and on their first editions, have finally discovered a quite number of her writings which had not been collected yet in those editions: for example, the writings of such kinds as short poems, long verses, fairy tales, travel writings, children's literature with illustrations, and critical essays of plays and films. In studies demanding thoroughly scholarly exactness and exhaustiveness, it might become a crucial fault to overlook the materials which should be examined in them. The present author wants to predict that, hereafter, the study of *Fumiko Hayashi* can most probably enter the second phase.

At the end of this paper is added a list of the writings which the present author has found other than the works collected in the whole volumes of Fumiko Hayashi published by Bunsendo Shuppan.

*Keywords: Fumiko Hayashi, Frozon Land, Flower's Life, Shin Jyo En, Hideki Tojo, Douglas MacArthur*